



日本河川・流域再生ネットワーク <http://www.a-rr.net/jp/>  <https://www.facebook.com/JapanRRN>

「日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN)」は、河川再生について共に考え、次の行動へ後押しする未来志向の情報を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に活動する団体です。またアジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN)の日本窓口として、日本の優れた知見をアジアに向け発信し、海外の素晴らしい取組みを国内に還元する役割を担います。

| 目次 | Pages |
|------------------------|-------|
| ➤ JRRN 事務局からのお知らせ..... | 1 |
| ➤ 会員寄稿記事..... | 3 |
| ➤ JRRN 会員募集中..... | 9 |

JRRN 事務局からのお知らせ (1) JRRN Activity Report

「桜のある水辺風景 2017」 今年も写真とメッセージを募集しています！

事務局のある東京は桜が満開を迎えました。

水辺がつくる美しい景観の未来への継承を目的に、今年も皆様が撮影された「桜のある水辺風景」の写真とメッセージを募集中です。沖縄から北海道まで、日本の水辺の魅力を再発見できるような素敵な桜の水辺写真をお待ちしています。【応募〆切：5月22日(月)】



※募集案内ページはこちらから：

<http://jp.a-rr.net/jp/news/info/776.html>

なお、本年も Facebook でのご応募が可能ですので、Facebook でのご応募方法は以下をご覧ください。Eメールでのご応募頂いた作品も Facebook でご覧頂けます。

※facebook でのご応募方法はこちらから

<http://jp.a-rr.net/jp/news/info/772.html>

桜のある水辺風景 2017 応募要項 (Eメール応募方法)

- **応募資格**：どなたでもご応募いただけます。
- **作品規定**：ご本人が 2017 年に撮影したデジタル写真 (3MB 以内/枚) のみの投稿とさせていただきます。応募はお一人 5 点まで可能です。なお、個人が特定できる人物画像が含まれる場合は被写体の方の了承を得てください。
- **応募方法**：「応募シート」に、題名、撮影場所、撮影年月、メッセージ、氏名、Eメールアドレスをご記入の上、写真と共に以下応募先へEメールで送付下さい。
- **応募シート**：<http://www.a-rr.net/jp/info/letter/docs/Photo2017form.doc>
- **応募期間**：2017年3月2日(木)～5月22日(月)
- **応募作品の取扱い**：
 - ・ Facebook ページ及び後日作成の写真集の中でご紹介させていただきます。
 - ・ 応募作品を紹介する際には氏名も掲載させていただきます。
 - ・ 同一地点での類似した風景等の作品は事務局により写真集掲載作品を選ばせて頂く場合があります。
 - ・ 応募内容が本企画趣旨に沿わないと判断した場合は紹介を控えさせていただきます。
 - ・ JRRN の刊行物やウェブサイト等で使用させていただきます。
 - ・ 応募作品は返却致しませんのでご了承ください。

(JRRN 事務局・和田彰)

JRRN 事務局からのお知らせ (2) JRRN Activity Report

小さな自然再生普及プロジェクトー「水辺の小さな自然再生」普及冊子のご紹介

水辺でできる小さな自然再生の更なる普及促進を目的に、小さな自然再生の概要や取組む際の留意点、また「小さな自然再生」研究会による普及促進活動を紹介した簡易冊子を作成しましたのでご紹介します。



みんなに発案と協働のチャンスがある
手づくり型の自然再生

自然再生と聞くとどうしても大規模なものを想像してしまいがちですが、費用が安く、子どもからお年寄りまで誰もが気軽に参加し、そして時には失敗をしながらも活動の効果が短期間で目に見える、そんな地域による取組みが「小さな自然再生」として注目されています。例えば、川の上下流の連続性を回復するための手作りの魚の通り道づくり、川の水が減ったり洪水が起きたときの魚の逃げ場所の造成、さらには絶滅危惧種を復活させるために地元の子どもたち総出で川底の石をひっくり返して川を直す活動などなど。

あなたの近所の水辺を自分達のお庭の様な感覚で、またこれまで通っていたスポーツジムの代わりに気持ちのよい汗をかく場として、日曜大工感覚で地域の仲間とともに楽しみながら、肩肘張らず、気軽に取組む「小さな自然再生」をあなたもはじめてみませんか？

「小さな自然再生」研究会 / 日本河川・流域再生ネットワーク

JRRN では、「小さな自然再生」事例集編集委員会（「小さな自然再生」研究会に 2016 年 7 月に改称）の協力を得て「できることからはじめよう 水辺の小さな自然再生事例集」を 2015 年 3 月に発行しました。

※事例集ダウンロード URL

<http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/104>

事例集発行から丸 2 年を迎えた今なお、全国の川づくりに取組む皆様から本事例集を送付して欲しいとのリクエストを頂いておりますが、冊子の在庫がほぼ尽きようとしています。

そこで、本事例集の抜粋版として、事例集前半の考え方や地域づくりへの効果、また留意点や安全管理についてとりまとめたものが本簡易冊子になります。合わせて、事例集発行以降、「小さな自然再生」研究会として取組んでいる、ホームページ運営や自由集会、また現地研修会など、水辺でできる小さな自然再生の担い手の育成に向けた普及促進活動についても紹介させて頂きました。

既に小さな自然再生に取り組んでいる方々はもちろんのこと、新たに水辺でできる小さな自然再生をやってみようとお考えの皆様にもご活用頂ければ幸いです。

また、事例集でも紹介した全国の先進的な取組み事例については、以下の「水辺の小さな自然再生ホームページ」でも紹介しておりますので、簡易冊子と合わせてご活用下さい。

※先進事例の紹介 URL

<http://www.collabo-river.jp/works/>

なお、本冊子は、(公財) 河川財団の河川基金の助成を受けて作成されたものです。

■本冊子の「印刷製本版」入手方法について

川づくりに取組む団体を対象に、勉強会等での活用を目的に本冊子の印刷製本版(複数部)をご希望の場合は、送料のみご負担頂き無料で提供致します。

詳しくは JRRN 事務局までお問合せください。

Email: info@a-rr.net / 電話: 03-6228-3865

■冊子名: 水辺の小さな自然再生
～あなたもはじめてみませんか?～

■発行: 「小さな自然再生」研究会/JRRN

■発行年月: 2017年3月

■ページ数: 16ページ

■構成:

- 水辺の小さな自然再生とは
- 小さな自然再生を地域づくりに～上西郷川を例に
- 小さな自然再生を行うための留意点
- 安全管理について
- 小さな自然再生の普及に向けて

<ダウンロード URL>

<http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/181>

(JRRN 事務局・和田彰)

第12回「川の日」ワークショップ関東大会 (2017年3月開催) 参加報告

寄稿者：肥田野美琴 (筑波大学白川 (直) 研究室・JRRN 団体会員)

1. はじめに



図1 会場の様子

2017年3月18日(土)、成城ホールで第12回「川の日」ワークショップ関東大会が開催されました。私たち筑波大学白川研究室からは2名(肥田野美琴、上田純祐)が発表しました。手が空いているときはタイムキーパーなど進行のお手伝いをし、参加されている方々の発表を楽しませていただきました。

関東大会は積極的に若者を歓迎する空気を作り出しているからか、小中学生、高校生のエントリーが目立ちました。颯爽と優秀賞をさらっていく彼らに、大学生も負けられないと思う次第です。

今大会にエントリーした団体はポスター展示のみも含めて、21団体でした。問題意識やアプローチは各々ありますが、河川を愛する気持ちは皆同じ。議論やポスターセッションによって、普段は活動しない川の知識も深められ、非常に有意義な一日となりました。

2. 当日の進行

午前中は国から河川協力団体に指定されている3団体の発表でした。鬼怒川のうじいえ自然に親しむ会の生物多様性を守る取り組み、荒川クリーンエイド・フォーラム「ストップ川ごみ」、多摩川のとどろき水辺の一年を通した活動。どれも充実した内容で、質疑応答も盛り上がっていました。

その後昼休憩を挟み、ポスターセッションが行われました。

議論が温まったところで、生き物・環境・学習をテ

ーマにしたAグループから発表が始まり、地域・水環境・防災・情報のBグループの発表を続けていきました。そして、参加者全員からの投票をもとに、優秀賞と特別賞を決め、表彰式を行いました。



図2 活動団体のポスター

3. 発表内容

私たちはBグループで「常総市を防災先進都市へ!!」という題で発表いたしました(図3)。

鬼怒川関連の防災をテーマにした研究をしている学生もいることから、学生の研究も併せて発表させていただきました。

【タイムライン検討会】

白川研究室は茨城県常総市と下館河川事務所に協力する形で、常総市の「マイタイムライン検討会」の運営を手伝っています。一昨年の関東・東北豪雨での鬼怒川氾濫を受け、住民が自らの避難行動を考える場を設けることで、逃げ遅れ0を目指す取り組みです。

※参考： みんなでタイムラインプロジェクト

<http://www.city.joso.lg.jp/jumin/anzen/bosai/1480292603525.html>

【調査・研究】

一昨年の鬼怒川氾濫で、氾濫した水がどこで止まったのかを検証したところ、およそ11%が自然地形であることがわかりました。そのため、自然地形は浸水被害軽減に役に立っているのではないかとという研究です。

併せて、地形分類図を使って旧河道などを調べ、地

形的に安全である、危険であるということをゾーニングしました。おおよそではありますが、将来的に移転すべき場所を示すことができました。

【ハザードマップの改良】

ハザードマップはその地がどれほど浸水するかを教えてくれるものですが、自治体ごとに作られているために、例えば市境に住んでいる住民にとって必要な隣接自治体の情報が掲載されていません。また、結局いつ避難すればいいのかわからないということから、地区ごとのハザードマップを作成し、氾濫水の推定最短時間を盛り込もうという研究です。

【市役所の対応】

常総水害時に設けられた災害対策本部の経験から様々な教訓が得られました。この研究では、常総市の地域防災計画とタイムラインを参照して、全体の業務量を把握し、それぞれの事務に対する所要人員を検討しました。

これに関しては「職員の意見も汲んでくれると嬉しい」とのコメントを頂きました。

4. おわりに

私たちの発表は大変光栄なことに、特別賞を受賞しました。私たちだけではこの発表はできませんでした。常総市の皆さんや下館河川事務所とともに受賞したと考えています。

白川研究室としては今後も『川と人』ゼミの通り、川と人のかかわりを重視しながら研究・社会貢献活動を進めていくつもりです。

第12回「川の日」ワークショップ関東大会実行委員会と国土交通省 関東地方整備局の方々、そして発表を聴いてくださった皆さんにこの場を借りて感謝を申し上げます。

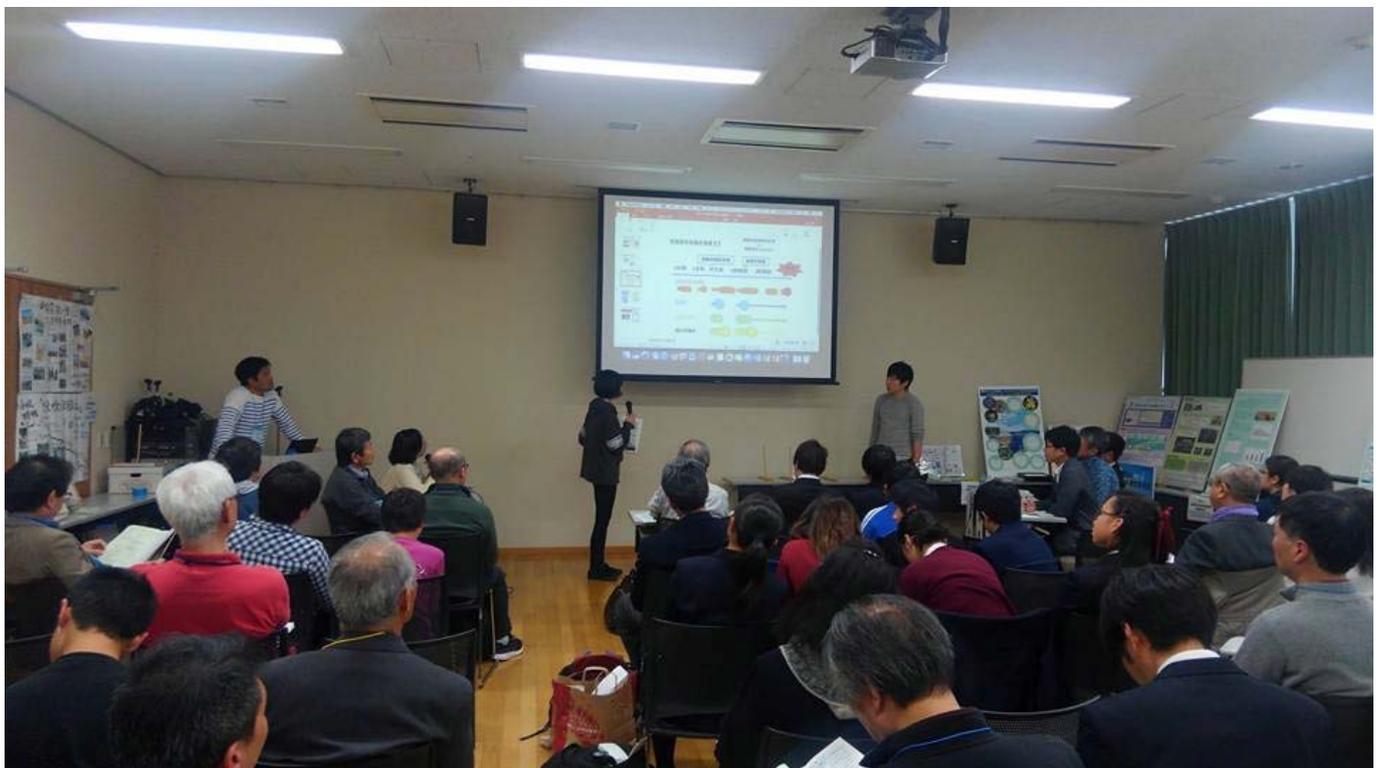


図3 「常総市を防災先進都市へ！！」発表の様子

4月



撮影：2017年3月（岩手県一関市・磐井川）



あの日のあの川 リレー日記 ～第27話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第27話主人公 讀井 知（さない さと）

（筑波大学大学院 システム情報工学研究科 社会工学専攻 都市環境行動学研究室）

（■川ガール・□川系男子）

（出身地を流れる川：茨城県小貝川）

「白鳥と待つ川」

いつのこと？： 幼少～現在

どこの川？： 磐井川（岩手県）

先月号を執筆された坂本さんからのバトンを受け、「正真正銘の川系男子の後では川ガールを名乗ることなんてできない…」と身動きが取れなくなっていたが、勇気を振り絞って家の外に出てみると家の周りには小貝川や鬼怒川や利根川が流れ意外と身近にたくさんの川があることに気が付いた。そして記憶の旅に出るとさらに多くの川が私の周りにはいつも静かに流れていた。

今回は私の心の故郷であり母方の実家がある岩手県一関市を流れる磐井川について紹介したい。磐井川は栗駒山を源に発している。栗駒山にある須川高原は、冬場は雪が深いですが、少し暖かくなると春先にはミズバショウ、初夏にはニッコウキスゲやサクラソウなどの清楚で可憐な山野草を楽しめる。秋には紅葉が絶景で、初夏から秋の間には須川温泉という温泉が開かれることから地元住民だけでなく隠れファンも多い地域だ。



巖美溪

中流には巖美溪と言う国の名勝があり、栗駒山の噴火によって堆積した凝灰岩が磐井川の水流によって浸食されてできた迫力ある景色を楽しめる。ここを流れる磐井川は、青く美しくそしてとても力強い。この溪流の対岸にロープを張り、ロープウェイのようにして団子を運び販売する郭公団子は今では「空飛ぶ団子」としてメディアで注目され全国でも有名になった。

そこから少し下ると一関駅前の地域に流れ出る。町を流れる磐井川は中流までと変わり、地域の生活に寄り添って静かに流れる川になる。人に寄り添う川はその水面に様々な景色を映した。

暖かい時期、磐井川では様々なイベントが行われる。東北の夏は短い。その短い夏を精一杯謳歌するように

人々は川に集い楽しむのだ。花火大会の日には、幼い女の子たちの愛らしい浴衣の柄や男の子たちの光るおもちゃ、屋台の食べ物、そして大きな花火が暗くなった川面に反射する。そして行きかう人の笑顔を幸せそうに華やかに揺らすのだった。またある時は、亡くなった方を偲び灯籠流しが行われる。そんな時は独特な物悲しさと懐かしさが入り混じったような優しいオレンジ色の灯りをのせて川はゆったりと静かに流れるのだった。

冬になり寒くなると、川は河原で遊ぶ子供や家族連れの幸せな日常を映した。私は幼いころ身体が弱かったため、祖父母宅に長期滞在し空気の綺麗なこの地で毎日を過ごすことが多かった。そんな私の楽しみというと、磐井川に渡ってくる白鳥におやつをあげることだった。冬場は防寒のためにスキー用のジャンパーを着せられ、帽子や靴下を二重に身に着けるために外出は窮屈で億劫だったが、白鳥におやつをあげる時だけは別だった。

白鳥は美しい見た目とは反してきゃーきゃーと、はしゃいでいる様な声で鳴く。土手に止めた車のドアを開け、その声が聞こえると私の胸は飛び上がるように高鳴るのだ。土手から転がるように河原に走り降りると、両手にかっぱえびせんが何袋も入ったビニール袋を持つ祖父母を携え、私はただひたすらかっぱえびせんを白鳥たちに向かって投げる。周りにも同じような家族連れがいたが、我が家のかっぱえびせんの量はどこよりも多かったと思う。手のひらいっぱいにつかんで、白く大きい白鳥に向かって何十分も何度も何度も投げる。気合が入りすぎて、終り頃は細かく潰れたえびせんが手のひらにベトベトくっついていて、



橋に飾られた白鳥のオブジェ

空になったかっぱえびせんの袋を恨めしそうに握りしめる私に対し、「白鳥さんは今年もさとちゃんが来るのを待っていたんだね。明日も来ようね」と、祖父母宅に戻る車の中で家族は優しく声をかけてくれた。

滞在中、特に予定のない日は毎日飽きずにおやつをあげに来た。だが、白鳥は渡り鳥なので、2月3月になると徐々にいなくなってしまう。大群でいつものようにきゃーきゃーと楽しそうな声をあげながら大空を飛ぶ姿は、青い空に白く大きい身体が映えて冷たい東北の空気とともに胸をすっとさせる。その頃は私も4月の新学期に向けて自分も茨城に帰らなければならない。茨城の日々が嫌なわけではないが、豊かな自然や優しい祖父母のもとを離れて、日々の喧騒の中に戻っていく自分と重ねて「頑張れよ～」と大空を見上げると、空を舞う白鳥の姿は滲んでしまうのだった。

中には、なかなか飛び立たない白鳥もいた。それはそれで胸が締め付けられた。羽を怪我しているのか、仲間はずれにされて悲しんでいるのか、飛ぶことをあきらめているのか、ここが好きなのか、想像してもわからないが、幼い私は「このままじゃ死んじゃうかもしれない」と必死だった。大声をあげながらできるだけ近寄って追い立てた。それでも飛び立たない白鳥を後に残し帰らなければならないときは「どうか気温が高くなってでも死んでしまいませんかように」と帰りの車の中でひたすら手を合わせるのだった。

大きくなるにつれて私の身体は頑丈になった。それと同時に祖父母宅に行く回数も滞在日数も減った。特に町を流れる磐井川を訪れる回数は必然と少なくなり意識することはなくなっていった。



磐井川河川公園

10年以上ぶりだろうか。今回3月末に訪れた久しぶりの磐井川は記憶と変わらず大きく静かに流れていたが、人の姿はなかった。川は曇った空だけをうつしていた。昔白鳥におやつをあげていた河原におりると、遊具は壊れており、草が背が高く生えていた。そして、ネットが張ってあり川面に近づくことができなかった。たださえ人口の流出が進む地方都市では川で遊ぶ子供の姿を見ることはもうできないのかもしれない。白鳥に関しては以前のように飛んできているのかどうかもわからない。いずれにしても3月末では会える可能性はないだろう。

変わらない川の流れと、変わる社会や環境の変化を感じ、少し切ない思いで土手や河原を歩いた。想いを巡らせて考えてみれば心の故郷のこの地ではこの10年で様々なことが起こっていた。一関駅前には昔は一関銀座と呼ばれ観光拠点地として賑わいを見せており、私が小学生の頃までは華やかな時代の名残があったが、いつ

の間にか高齢化の波を受け昔ながらの商店街はシャッターが下りている店が増えた。東日本大震災では津波被害はなかったもののたくさんの建物が壊れた。でも、暗いことばかりではない。ここ数年ではリノベーションカフェやクリエイターさんが手掛ける手作りのお洒落なお店が増えていた。母世代の人たちが定年退職を迎え都会から帰ってきているという話もよく聞く。子供は少なくとも、社会に適応しながら動的に生き生きとしていている印象を持った。

故郷に生きる人達も変わっていた。私にとって大きなことは、私を大切に育ててくれた大好きな祖母が認知症を発症し介護が必要になったことだ。ニコニコ笑顔で家族の中心にいた祖母は無表情になった。私の母は毎月介護に茨城から通うようになり、私は母の、娘としての姿を初めて見るようになった。いつも外交的で華やかだった祖父は祖母を心配して家から離れなくなっていた。家はヘルパーさんが頻繁に出入りしていて、介護も思うように手伝いできない私はオロオロしてしまう。岩手には親戚も多い。私を姉のように慕ってほしい。いつまでも小さいと思っていた女の子もこの春いよいよ大学生になる。同世代の従兄弟達はそろそろ結婚に向けた動きをしているらしい。…

日々は緩やかに変化するはずなのに、記憶と現実では時の流れ方に差があるようだ。自分の故郷とと思っている場所の今を私はもしかしたらあまり知らないのかもしれない。川沿いを歩きながらそんなことを考え少し取り残されたような気持ちになった。

その時、近くでバタバタと音が聞こえた。目をやると羽ばたく一羽の白鳥が目に入った。まだ旅立たない白鳥が残っていたのだ。私が子供のころ「生きていて欲しい」と願った子ではないのかもしれないが、私の胸には懐かしさと喜びが溢れた。私の居場所がこの地に今もあるとその白鳥は言ってくれているように感じた。



まち中を流れる磐井川

私の幼い頃の記憶は美しい自然に包まれていることが多い。けれど、日常に追われるうちにその感動を振り返る時間がなくなり、生き生きと息づいていた自然はいつしか思い出の中の2次元の背景となってしまふ。美しい絵画の中やふとした言葉によって、それらの景色が記憶の底から呼び起こされることはあるが、こうなるとそれは他人が作った芸術のように少し距離があるが故の感動だった。時々思い出されるからこそ懐かしく胸が熱くなる、そんな類の思い出の風景が記憶の中にはたくさんある。そしてそうした思い出の景色を後に訪れると、

記憶とは違うという印象を受けることが多かった。期待外れだったと感ずることも記憶より美しく感ずることもあるが、それ以上に純粋に、ああ人間が変化するように景色も変化するのだということに気が付かせられる。

川はよく人生に例えられる。上流から下流までその様相は変化し、動植物を育み、癒しを与え、周囲の環境と影響し合いながら海に流れ出る。その無常さや寛容さや雄大さに人は感動し美しさを感じる。だが、私が今回磐井川を通して感動した川の顔は、時代を映しながら誰もが帰ってこられる場所としてあり続けてくれることだ。子孫を残すために帰ってきた魚を、羽を休めにきた渡り鳥を、心の故郷としていつまでも大切に想い続ける人を、包み込み、変化する街を見守りながら、川はそこに変わらずあり続けてくれる。水面にはその時代を映し、記憶に残してくれる。川はそれ自体がダイナミックに常に変化しながら、周りの変化するものを受け止めているようだった。

この春、私は博士課程に進学するためまだ学生が続くが、同い年の友人たちは学部卒の人だけでなく修士課程に進学した人も社会人になる人が多い。私に「これからの研究生活へのエール」としてバトンを渡してください。坂本さんもこの春つくばを旅立たれ新しいフィールドで活躍される。そんな皆さんに、私の心を育み思い出を作り帰って来るのを待ってくれる心の故郷の川の存在を紹介してはなむけの言葉としたい。

※本稿で紹介したすべての写真は2017年3月に撮影したものです。

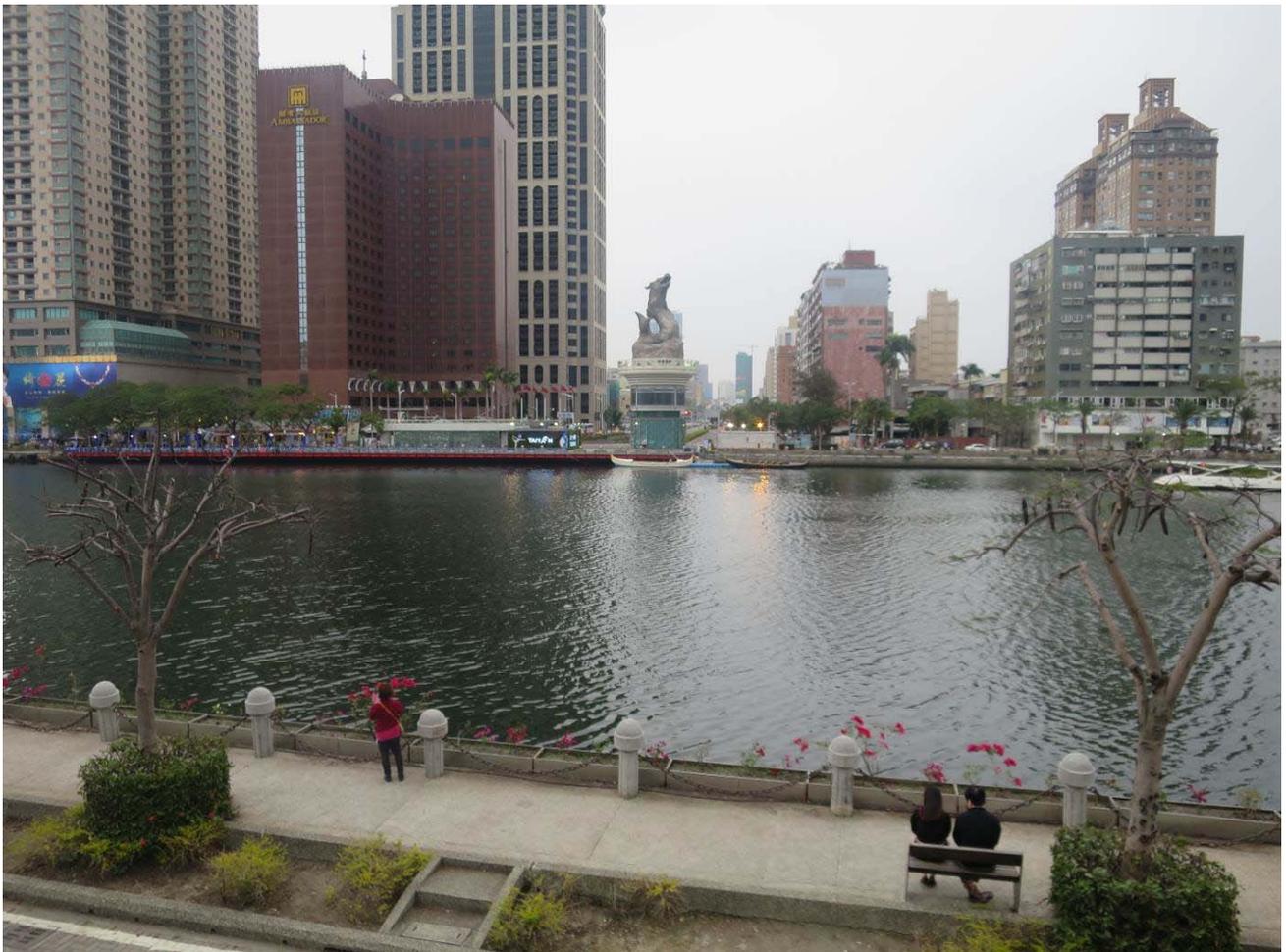
(次は前田紗希さんにバトンを託します)

水辺からのメッセージ No.95

岡村幸二 (JRRN 会員)

愛を語り合う水辺：

水質改善で魅力あふれる川辺に いまや台湾を代表する水の都



撮影：2017年3月（台湾高雄市中心街・愛河）

◆台湾の海の玄関口

台湾第二の都市・高雄市は世界第三のコンテナ港です。「海上都市」というコンセプトで、水辺を軸に発展している代表的な“水の都”です。今では観光客も多く訪れて川辺には人々の往来が絶えません。

◆恋人同士の散歩が似合う

かつては汚濁と悪臭により市民に避けられていましたが、1985年ごろから水質改善事業が開始され、2000年後半には50種以上の魚介類が確認されました。両岸に幅20mを超える遊歩道が1km近く続きます。

■ JRRN 会員皆様からの寄稿記事を募集しています！

旅先で見かけた水辺の風景や思い、水辺再生に関わる様々な活動報告、また河川環境再生に役立つ技術等、JRRN 団体・個人会員皆様からの寄稿記事をお待ちしています。(JRRN 事務局)

JRRN 会員募集中 JRRN membership

■ JRRN の登録資格 (団体・個人)

JRRN への登録は、団体・個人を問わず無料です。市民団体、行政機関、民間企業、研究者、個人等、所属団体や機関を問わず、河川再生に携わる皆様のご参加を歓迎いたします。

■ 会員の特典

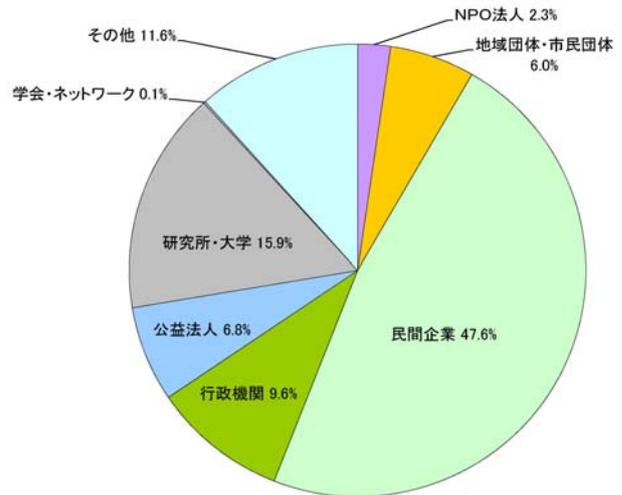
会員登録をされた方々へ、様々な「会員の特典」をご用意しています。

- (1) 国内外の河川再生に関するニュースを集約した「JRRN ニュースメール」が週1回メール配信されます。
- (2) 国内外のセミナー、ワークショップ等の開催情報が入手できます。また JRRN 主催行事に優先的に参加することが出来ます。
- (3) 必要に応じた国内外の河川再生事例等の情報収集の支援を受けられます。
- (4) JRRN を通じて、河川再生に関する技術情報やイベント開催案内等を国内外に発信できます。
- (5) 韓国、中国をはじめとする、ARRN 加盟国内の河川再生関連ネットワークと人的交流の橋渡しの支援を受けられます。

■ 会員登録方法

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.a-rr.net/jp/member/registration.html>



2017年3月31日時点の個人会員の所属構成
(個人会員数：755名、団体会員数：61団体)

※3月の新規入会数：個人会員2、団体会員0

JRRN 会員特典一覧表 (団体会員・個人会員)

| 提供サービス | JRRN 個人会員 | JRRN 団体会員 | 非会員 (一般) |
|--|--------------|--------------|-------------|
| 1 ホームページへのアクセス及び記事へのコメント入力 ※1 | ◎ | ◎ | ◎ |
| 2 ホームページ「イベント情報」欄でのイベント掲載 ※2 | ◎ | ◎ | ◎ |
| 3 ニュースメール(週1回)の配信 ※3 | ◎ | ◎ | × |
| 4 Newsletter(毎月)及び年次報告書(年1回)等の発刊案内メールの配信 ※3 | ◎ | ◎ | × |
| 5 JRRN/ARRN主催行事の優先案内・優先参加 ※4 | ◎ | ◎ | × |
| 6 国内外の河川再生関連情報・技術収集や専門家・組織紹介の支援 ※5 | ◎ | ◎ | × |
| 7 ホームページ「会員からのお知らせ」内及びニュースメール「会員からのご案内」欄で団体が関わる行事・出版物・製品等の案内の掲載 ※6 | △※7 | ◎ | × |
| 8 ホームページ「会員登録状況」「国内団体」内及び年次報告書内で団体名の掲載 | × | ◎ | × |
| 9 ARRN活動に関連する英語ニュース(ARRN Newsletter等)の不定期配信 ※8 | × | ◎ | × |
| 10 JRRN及びARRNが保有する国内外専門家・団体等との連携等の支援 ※9 | × | ◎ | × |

会員特典詳細はウェブサイト参照：<http://www.a-rr.net/jp/member/benefit.html>

【お気軽にお問い合わせください】

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局



〒104-0033 東京都中央区新川1丁目17番24号 新川中央ビル7階 (公財)リバーフロント研究所 内

Tel:03-6228-3862 Fax:03-3523-0640 E-mail: info@a-rr.net

URL: <http://www.a-rr.net/jp/> Facebook: <https://www.facebook.com/JapanRRN>

JRRN 事務局は、「アジアにおける河川再生のためのネットワーク構築と活用に関する研究」の一環として、公益財団法人リバーフロント研究所と株式会社建設技術研究所国土文化研究所が公益を目的に運営を担っています。

